

海に見える町に住んでいたナーヤさんが、一緒に暮らすことになった。

ある日、閉じられたままになっていたテオおじさんの工房を、ナーヤさんが開けた。

そして、おじさんがしていたのと同じように、ナーヤさんも、工房の小部屋にある、機械で立てられた大きな板に大きな紙をはさんで線を引き、図を描いた。

また、テオおじさんがしていたように、ナーヤさんも朝早くから仕事に出かけ、夜遅くに帰ってきた。

ナーヤさんは、殆ど一人で仕事をしていた。工房に出入りする人はとても少なくなった。

いつしかナーヤさんから、絵の具の匂いが消えていった。

誰もが、何か大きな掘りどころを失ったようなもの足りなさを抱えながら、日常が戻っていった。

あの運河沿いのアカシアの並木道は、緑が茂り甘い香りの白いが咲き、夏の木漏れ日が輝き、そして黄葉し、季節が廻った。

月日が静かに流れた。

ハナが死んだ。

クロフカが止めるのも聞かずに、野良の仲間に誘われて、あのブドウ畑の北側にある四角い建物の敷地に出かけていったのである。

南風の強い春の日のことだった。

ハナが弾んだ声で呼びかけながら、門から駆け込んできた。

「ねえ！ クロフカあくねえねえ！ 西のはずれの工場ところで、何かやってるってさ」

「え？」

クロフカはフェンス越しに顔を挙げた。

その日に限って、ナーヤさんが庭のフェンスを全て閉めて出かけた。

「何か楽しいことがあるんだって……」

「うん……何か怪しいよ。やめたほうがいいよ」

「平気だよ！ 行こうよ、クロフカ」

「ダメだ、行っちゃいけない」

「なんでさ？ 美味しいもんくれるんだって……あたい行きたい」

「そんなの嘘だ、行っちゃダメだ」

「やだ、行きたいよ……みんな行ってくてさ。みんなと一緒に行きたいよ」

「ハナ……いい仔だから、僕の言うことを聞いて」

庭から出られないクロフカは、必死になってハナを引き止めた。

しかしハナは聞こうとはしない。

「クロフカのいじわる！ 行かしてくんないの！ 自分が番犬で、出られないからおもしろくないんでしょ！」

「違うよ！」

「もう、いい！ あたい一人で行く！」

「ハナ！ ダメだ！ 危険だ」

「 やあだね 」

その時、薄汚れたブチ犬が、通りから姿を現した。

「 おうい、みんな行くぜ……肉を配ってくれるんだってさ。 貰いにいこうぜ 」

「 なんだって！ 」

「 ほらあ……ごちそうだよお 」

クロフカは直感で危険を感じた。

「 よせ、みんな止せ！ よしたほうがいい。怪しいよ！ 」

「 へんだ！ あたい、行くもんね！ クロフカのばかか 」

そう言い放つと、ハナはマーサおばさんの花壇を踏み越えて外に出た。

「 ハナ！ ダメだ！ 戻って来い！ 危ないよ！ 」

しかし、ハナは迎えに来たブチ犬と連れ立って行ってしまった。

クロフカは気が気ではなかった。

庭の中をぐるぐると歩き回り、あちこちの庭木に八つ当たりするかのようになり、その根方をガシガシ掘ったり、かじったりして、やがて諦めたように芝生の上にふてくされて横になった。

それからどのくらい経っただろうか。

その日の午後、遠くからハナのこえが聞こえてきた。

「 クロフカあゝ クロフカあゝ 」

クロフカは飛び起きて庭を駆け回った。  
確かにハナの声だ。

「 ハナ！ ハナ！ 」

見ると、遥か向こうから一匹の犬がよれよれ走ってくる。

「 クロフカあゝ クロフカあゝ 助けてえゝ こあいよおゝ 」

ハナは、泣きながらこちらに向かって走ってきた。

なんだかひどく汚れていて、しかも怪我をしているらしく、少し足を引きずってようやく走っているようだ。また、頭からも少し血が流れている。

が、クロフカの姿を見つけると、さらに夢中で走ってきた。

「 クロフカあゝ あそこ、こあいよお！ 殺されるよお！ 」

見れば、その姿はひどく傷だらけで、あの笑顔の愛らしい顔が、痛々しく腫れ上がっている。

いったい、何があったのか……

ハナは、クロフカのところにも夢中で駆けってくる。よほど怖かったに違いない。

「 ハナ！ 危ないから走るな！ もう大丈夫だから走るな、ハナ 」

クロフカは通りの反対側を走ってくるハナを心配そうに見つめながら、注意をよびかけた。

しかし、ハナはクロフカの忠告を聞かずに、一番近い庭の生垣から入ろうと、不用意に道路を渡りかけた。

「クロフカあゝごめんよおゝ あたいさあ……」

「ハナ！危ない！戻れ！」

その時、普段はめったに通らない大型のトラックが、猛スピードで道路を走りぬけた。

急ブレーキのおとが響き渡り、何かがぶつかる鈍い音がして、ハナの体が弧を描いて宙を飛んだ。

車は、一瞬速度を落として止まりかけたが、そのまま走り去った。

クロフカは、呆然として道路を見つめた。

あれ以来、ハナと一緒に出かけたブチ犬や他の野良犬たちも、それつきり帰ってはこなかった。

風のうわさで、そこに集まった犬たちは皆、おおきな車に乗せられてどこかに行ったという。

つづく